

マルコ 2:13-17

202 2-6-26

「いのちに招かれる主」

イエス様のご生涯を記録した四つある福音書。それぞれに特徴があるが、中でもマルコ福音書は独特の描き方でイエスさまの救い主としてのお姿を記録する。イエスさまの誕生について例に挙げると、マタイの福音書はユダヤ人に旧約聖書に預言された救い主はイエス様を伝えるために、アブラハムの子孫ダビデの子孫としての系図を延々と書いていく。

ルカ福音書は、記者ルカ自身イエスさまと生活した経験がないこともあってイエスさまのことを事前の綿密に調査して書いた。そのためほかの福音書にない、イエス様誕生のいきさつの記録が多い。旅の途中でマリアが家畜小屋で出産したこと。野宿をしていた羊飼いの所に天使が現れて、救い主の誕生を歌って知らせたこと。クリスマスカードでのなじみの出来事が記されている。

一方マルコそうしたイエス様の誕生の様子を描く記録はない。冒頭から「1:1 神の子イエス・キリストの福音のはじめ」と切り出して、救い主として行動するイエスさまの活動を描いていく。

一説によると検証したマルコはイエスさまの弟子だったペテロに従って伝道活動を続け、そのペテロから聞かせてもらったメッセージを元に福音書を描いたといわれている。

このレビという取税人とイエスさまとの出会いの出来事も、ペテロの語ったメッセージからのもの。この取税人レビとイエスさまとの出会いのエピソードはマタイ、ルカも記録する。ただ、ほかの福音書に比べ簡潔に出来事を描くマルコの福音書の記録が、詳細このことを描く。この取税人レビがキリストを信じた出来事が直接の目撃者だったペテロにとって、特に印象に残った出来事だったのだろう。

「2:14 イエスは、道を通りながら、アルパヨの子レビが収税所にすわっているのをご覧になって、「わたしについて来なさい。」と言われた」。

レビという男の生活背景は、多くは分からない。わかるのはその職業が取税人

だということ。ユダヤ人にとってはローマの手先になって私腹を肥す嫌われた職業についていた。そして彼の名前はレビ、父アルパヨによってそう名づけられたこと。「レビ」という名前は、イスラエルの12部族で神に仕る家系、レビ族を思い起こす名前。また、レビ人は、自分の私有財産は持たず、人々の捧げものでその生活をまかなうことが求められていた。だから、生きていくために私利私欲であくせくせずに、神様にすべてを期待して、信頼して生きてほしい、という親の願いだったのだろう。

だとすると、不正を行って私腹を肥やしていた取税人をしているレビは、ずいぶん親の願いとは違った生き方をしてしまっていることになる。

レビがどうして取税人という仕事に就いたのか？このような人生を歩んでいたのか？そのことは聖書には書かれていない。ただ、取税人は楽になれる仕事ではない。この取税人の権利は、それなりの金を積んで、ローマ政府から買い取ったといわれる。レビは仕方なく取税人をさせられていたのではなく、自ら選び取って、努力して、苦勞して取税人になった。人は何のために努力や苦勞をするのか。自分が幸せになるため。人からさげすまれる事を承知で、良心が痛むことを承知で、取税人にレビはなる。それは、人の幸せは持つものになることだ。そのために、人の期待や、自分の良心の痛みなど裏切ってもいい、とレビはそう思っていた。

でもこの時のレビは、自分なりに懸命に目指した幸せの中にいたのか。それを知る手がかりは、「レビが取税所にすわっていた」という記録。マルコ福音書は行動(アクション)の福音書といわれ、動きの中にその人の心情を描写している場面が多い。イエス様が、カペナウムの町に来て、人々がイエスさまに殺到する中、レビは税務署にぼつんと一人座っていた。いかにも孤独な姿。なぜ？彼はイエスさまに無関心だったのか？そうなら、一言イエスさまにお声を掛けていただただけで、ついていく事はないはず。おそらくレビは知っていた。救い主と呼ばれるお方がこの街においでになること。その方は偉大な神の力を持ち、人を癒し、生きる希望をお与えるお方だと言われていること。でもそれを知っていても、彼は何の行動も起こさない。

同じく取税人でキリストと出会い、信仰を持ったルカ 19 章に出てくるザアカイとはだいぶ違う。ザアカイは何とかイエスを見るために走り出て、背が低かったのでいちじく桑の木に登った。レビにはそんな無邪気さはない。

レビは取税人として、自分が不正をおこない、人々の反感を買い、神の喜ばない汚れの中を生活している。その自覚が強かったのだろう。自分はイエス様の所なんか行けないとレビはそう思っていた。自分の人生の可能性をあきらめていた。

十数年前、都内で午後からの会議があり、帰りの電車に乗っていた女子高生の一団乗り込み、キャッキヤと楽しそうにはなしていた。途中乗ってきた小学校の新入生を見かけて一つの生徒が言った。「いいな、あの頃良かったよね。毎日愉しくてさ。辛いことも悩みもなかったし。親も先生も今みたいにうるさくなかったしね。」「どうしよう、再来年私ら二十歳だよ。十代終わったら女なんておしまいじゃん!」。過去を取り返しのつかないこととあきらめ、未来にの失望するのは年齢とは関係ないのだと思った。

変えようのない自分へのあきらめの中で、レビは座っていた。彼は捜し求めていた幸せは、自分の仕事もたらす経済的豊かさの中にないことが分かってしまった。かといって、新たな可能性を発見するために立ち上がるのも、すっかり疲れてしまった。そうした無気力と、挫折感の中で彼は座っていた。

熱気球。燃料を焚いて温めて空気中で浮かんでいく乗り物。人生をのぼっていく熱気球にたとえると、上昇するには、温められた空気を気球に送り込むエネルギーが必要。それは人間の場合、よい人生を生きたい、幸せになりたいという願い。人であれば誰でも持っている願い。幸せになりたいという意欲はレビも持っていた。だから取税人になった。

次にガスに点火しなくてはならない。それは、動機付け。意欲を燃え立たせること。痩せたい、と漠然と書いていても動機付けにはならない。着たい洋服がある。このままだと病気になると、医者に警告された。

でもやる気、動機付けに点火しただけで熱気球は登っていかない。重りにしている砂袋を捨てるという作業をしなくてはならない。

人にとって、登っていくことを妨げる重石の砂袋は何か？それは不安。不安という砂袋、を捨てる。人には様々な不安がある。自分は、人とうまくやっけていっているのか？ちゃんと自分の存在は認められているのか？それはこれからもずっとそうなのか？自分が年老いて、いまできていることができなくなったとしても、そうなのか？

実は、この不安が生きていることの最大の関心事だから、先ほど言った動機付けにこの不安感が利用されやすい。不安をあおって、人を動かす。人に禁煙を勧める時に、「タバコを吸わない生活がいかに健康的で、経済的か」を論ずよりも、「喫煙者の病気の死亡率の多さ」を指摘し、肺がんで死亡した患者の解剖した脂に汚れ石化した肺を見せた方が効果的。そして社会的に見捨てられ、人から見捨て枯れる危機もある。「仕事の目標を達成しないと首だぞ！」、「しっかり勉強しないと、後で泣きを見るわよ！」、「親の言うことを聞かない子はうち子じゃありません！」。

でも、この方法は即効性はあるが、持続性はない。疲労感と、不信感、生きることへの自信のなさが後遺症として深くのこる。益々不安になっていく。

脅しのように即効性はないが、持続性のある、生きるエネルギーを生み出すのは不安の反対側にある、安心。ちゃんと自分の存在は認められているという安心ではその。安心感は、どこから生まれるのか？具体的には、愛されていることへの信頼。赦されていることの喜び。これがエネルギー。

作ほど申し上げたように登っていくには重りをしてなくてはならない。人生ではその重りは不安。不安という砂袋、を捨てることが必要。

この時のレビには不安の中にいた。最初は、人と比べて豊かだと確信できる何かをもっていなければ、という不安。その不安の解消のためにレビは頑張った。そして、気が付けば自分は自分の思い描いていたような幸せのなかにはいないという不安と孤独の中にいた。

では、ほんとのところ生きるエネルギーを生み出すのは、何なのか？それは不安の反対側にある安心。ちゃんと自分の存在は認められているという安心感。それは、どこから生まれるのか？具体的には、人に愛されている、受け入れられてい

るということへの確信。

イエスさまの招きは一言。この一言には何の条件も付いていない。もしこの時、レビがイエスさまについていく条件として、もう一度レビが自分の力で立ち上がり、正しい生き方をしていくことだとしたら、レビに二度と自分の人生をかえるチャンスはなかった。もし、この時イエス様が近づいてくださらなかったら、一生チャンスはなかった。でも、「2:14 イエスは、道を通りながら、アルパヨの子レビが収税所にすわっているのをご覧になって、「わたしについて来なさい。」と言われた。」相手を発見したのはレビではないイエスさま。近づいていったのはレビではない、イエスさま。声をかけたのはレビではない、イエスさま。人生の捜し物自体をすっかりあきらめていたレビに起こった生きることの変化、それは、キリストの側方の呼びかけが、きっかけのすべてだった。

私の生き方の失敗や未熟さを、論してくれる人は頼みもしないのに多い。でも、いつも近くにいる、批判せず、裁かず、励ましながらいっしょに生きてくれる・・・そうした人こそ貴重。残念ながらそんな出会いは、そうそうあるものではない。

「私についてきなさい」その一言でレビはキリストを信じる、という人生最大の決断をしていく。それは、この一言に真の人生の励ましと勇気を与えてくれる確かさを発見していったから。過去の失敗を責めるのではなく、今ある自分を支え励ます、人生の生涯のパートナーとなってくれる温もりを見出したから。

レビは変わる。彼が確かに変わったのは「2:15 それから、イエスは、彼の家で食卓に着かれた。取税人や罪人たちも大ぜい、イエスや弟子たちといっしょに食卓に着いていた」という記録からわかる。人との交わりを喜んでいるレビの姿が生き生きと表現されている。希望がなく硬直化した人生は、人との生き生きとした交わりには入れない。町の取税所で、孤独の中にいたレビではもうなくなっている。人を招くことの出来る、しなやかさと豊かさの中を生きているレビがここにはいる。レビにとって、イエス様の招きが「わたしについてきなさい」一言だから、その招きに応答することが出来た。人生の評論家でない、一緒にいって下さる方である、イエス様を知ることが出来たから。

レビの人生は、このお方との出会いで変わる。でも、せっかくのレビの人生の変化に思わぬ、批判が入る。「マルコ 2:16 パリサイ派の律法学者たちは、イエスが罪人や取税人たちといっしょに食事をしておられるのを見て、イエスの弟子たちにこう言った。「なぜ、あの人は取税人や罪人たちといっしょに食事をするのですか」。イエスさまが、本当に救い主なら、聖い神様のもとから来られたなら、世の罪汚れをお避けになるはず。どうして、あんな連中と交際を持つのか？

イエスさまの答えは「マルコ 2:17 イエスはこれを聞いて、彼らにこう言われた。「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」

(v.17) 丈夫なものに医者はいらない。私たちが招いている、今このままで、自信がなくていい、信じさえすれば・・・医者であるイエス様が、病人である私を招いていてくださる。

教会は立派な人が行くところでない、洗礼は立派な生き方をしている証明でない、私には、一緒に生きて下さる、医者であるイエス様が必要だと認めること。硬直化した、人としてのしなやかさを失った、生き方からの解放は、このイエス様しかない。この私にも「わたしについてきなさい。」と声をかけて下さる、招いて下さるイエス様だけ。

この私にいのちを手渡すために、キリストは十字架の上でいのちを捧げて下さった。私を本当の幸いな人生に招く、神の愛のシンボルとして、教会は 2000 年間、この十字架をかかげてきた。ここに、「私についてきなさい」のキリストの招きがあるから。

レビは、のちに名前を変える。レビからマタイへ。マタイ、神の賜物。私についてきなさい、と招かれて従った私の人生は、神のプレゼントだった。けして楽な人生を歩んだのではない。迫害の続く困難な時代に教会を導き、エチオピアでの伝道の途中、ペリオポスという町で殉教したといわれている。でも、自分の人生がイエスさまの招きに応じて歩めた人生は、とても幸いだったとマタイは言いたい。

(例: 数十年前九州の田舎町に母と高校生の娘の家族がいた。母が亡くなると、

親戚連中がしょってたかって高校を出たばかりの娘から家屋敷、財産を取り上げ
放り出してしまった。彼女は博多で就職し、将来の幸せな結婚を夢見てつましい
生活の中でコツコツと貯金をした。ある日私的な男性が現れプロポーズを。天にも
昇る思いの彼女に「立ち上げたい仕事がある。お金を用立ててくれ」。何の疑いも
なく預金通帳と印鑑を渡すとその日を境に彼と連絡取れなくなった。

そんな辛い気持ちでいた彼女を励ましてくれたのは同じ会社の同僚のクリスチャ
ンの女性。彼女に誘われ教会に行き新約聖書をもらった読み進めてマタイ5章
「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい」を恩田ときに彼女は聖書を床
に叩きつけて怒った。「許すことができるもんか。私から家と財産を奪った親戚た
ちを。私の心に潰れ込んで大事なものの全部奪っていった彼のことを。きっとこのイ
エスという男は人から裏切られたりしたことが一度もないのだ」。でも他に行くところ
がないので日曜日礼拝いき、することもないので聖書を読み続けた。そしてルカ
の福音書23章で十字架にかけられたイエスのこと「ルカ「父よ。彼らをお赦しくだ
さい。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」。この人は人に裏切
られた。同胞ユダヤ人に、自分が愛した弟子たちにまで。人に裏切られ殺されて
る最中、自分が言った通りことをしたのだ。この方を信じたら私は変わるかもしれ
ない。人を許したり愛したりする世界に私は生きていけるのかもしれない。クリスチ
ャンになり、幸せな結婚をしているという。

私たちは真に幸いで豊かな信仰の世界に招かれている。この一週間で通され
る現実、私たちの感覚でいうと幸いで豊かとはいいがたいものに思えるかもしれ
ない。でも神様はこの礼拝を通して今この時私たちを招いていてくださっている。
そのことを心にとめてこの一週間を歩んでいきたい。